

操り三番叟

長唄

全詞章

資料の題名「操三番叟」

三番叟物

〔本調子〕 天照す春の日影も豊にて、指す手引く手のひとさしは、昔を今に式三番有し姿を、狩衣小武田が作の出立、はへとうとうたたりたりら、たたりあがりららりどう

〔千代〕 千代の始の初芝居相河崎賑はしう人の山なす、蓬萊の鶴の羽重ね亀の尾の長き栄を三ツの朝幸心に任せたり

〔鳴〕 るは瀧の水、たきの水鳴るといふの、よい辻占よ天津乙女の様が許へ絶へず

絶へずとふたり、絶へずとふのがまことなら日は照るとも濡るる身ふ着つつなれふ羽衣の

松の十返り百千ざり絶へずとふたりありうどう、其の神のひこ恋草は千早振さのむかしより我敷島の大和歌、出雲八重垣妻ごめて、天下泰平国土安穩今日の御祈禱なり

〔三下り〕 おうさへ、おうさへ喜びありやわが此所より外へちやらドと思ふ、天の岩戸を今日ぞ開ける此の初舞基千代万代も、花のお江戸のとつぞ偏の御取立

おこがましくも御目見得をほんの鵜の真似鳥飛び、灘波江の岸の姫松葉も茂り愛し幾年住吉の神の恵みのあるならぞ君ふ扇の御田植

逢ふとは嬉しき言の葉も濱の真砂の数々に読むとも、なほよの年波やつきぬ年波や、翁を仇月者よついで袖引いて、なばかんせそふも千歳伸して水も漏さぬ中らち

深い縁ぢやないかいな、面白や相生のまつ夜の首尾逢ふの松ほんに心の武隈も岩代松や曾根の松あかり閨のむつごとに濡れて色ます唐崎の松の姿の若緑

〔千秋万歳〕 千秋万歳ぞんぞうぜい、五風十雨もおだやかに恵みを願ふたね蒔時と唄ひかなでて祝しけり